

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：14503

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531126

研究課題名(和文) 説明的文章を批判的に読むことを段階的、系統的に指導するための実践プログラム開発

研究課題名(英文) Developing practical program of critical reading of expository text for gradual and systematic instruction

研究代表者

吉川 芳則 (KIKKAWA, Yoshinori)

兵庫教育大学・学校教育研究科(研究院)・教授

研究者番号：70432581

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：批判的読みの指導に習熟する初期及び過渡期では、次の3点に基づき実践プログラムを構築することが有効である。批判的読みの要素(中でも具体例のあり方)を精選し、限定的に位置づける。学習活動として、筆者の意図を推論すること、自己の考えを形成することの順序性は、学習者の実態(筆者の立場での推論、自己の読み・考えの主張の程度の違い)によって決定する。具体例のあり方を軸に批判的読みのスキーマ形成の授業を分量の少ないテキストを用いて行う。

研究成果の概要(英文)：At the 1st stage of mastering how to instruct on critical reading of expository text, it is useful to make the instruction program based on the points as follows: Selecting skills of critical reading, and setting those skills limitedly in the lesson as learning contents. Readiness of learners(level of reading, asserting, inferring as the writer)decides the order between two learning activities (inference of the intention of the writer, making their thoughts). Instructing on making schema of critical reading with short text from the point of how to use specific examples

研究分野：国語科教育学

キーワード：説明的文章 批判的読み 段階的 系統的

1. 研究開始当初の背景

説明的文章を批判的に読むこと(以下、批判的読み)については、も多くの主張がなされてきた。都教組荒川教研国語部会(1963)は、表現面での論理性や筆者の発想、認識のあり方を検討の観点とする「批判的読み」を提唱し、この分野での研究の先駆けとなった。また野田弘・香国研(1970)や倉澤栄吉・青年国語研究会(1972)が提言した「筆者想定法」、小松善之助(1981)の「データ吟味の読み」も筆者の発想、考え方を表現、内容の側面から批判的に読むことを主張した。井上尚美(1983)の「評価・批判に関する発問」、森田信義(1989)の筆者の工夫を吟味・評価しながら読む「評価読み」も提言された。さらには、阿部昇(1996)の「吟味読み」、河野順子(1996)の「対話による説明的文章の読み」、長崎伸仁(1997)の「教材を突き抜ける読み」など、独自の観点を盛り込んだ批判的読みに関する実践的、研究的提案が1960年代から継続的になされてきた。

一方で、2003年に実施されたOECDによるPISA調査(生徒の学習到達度調査)において、日本の生徒の読解力は「熟考・評価」の力に問題があることが判明した。これを受け、文部科学省(2005)はテキストを内容、形式面から評価したり、自分の知識や経験と関連づけて建設的に批判したりする読み(クリティカル・リーディング)の充実を提言した。小学校平成23年版『学習指導要領』国語科でも、批判的読みが指導事項として新たに導入された。申請者も吉川芳則(2002)において、説明的文章の学習活動を多様に開発するための重要な内容として批判的読みを位置づけた。また吉川芳則(2007)では、社会科教科書掲載の説明的文章テキストを批判的に読むことの意義や可能性について論じた。吉川芳則(2011)では、説明的文章の事例のあり方に着目し

て批判的読みの可能性を検討した。

しかし、このように実践研究の蓄積、教育動向としてのニーズがあるにもかかわらず、批判的読みの学習指導は、一部の熱心な実践者を除いて積極的に実施されていない。最近ではクリティカル・リーディングを精力的に推進する有元秀文の一連の研究(有元2008a、2008b等)を受けた実践報告もあるが、多くの説明的文章の授業に批判的読みの観点はない。

その原因としては、初歩段階からより高次の段階の批判的読みへと発展させていく道筋を授業論として段階的、系統的に示した研究が見当たらないことが挙げられる。このことは、近年増加している若手教員の力量形成の観点からも重要な問題である。彼らにとって、批判的読みを授業に位置づけることへのハードルは高い。何を、どのように指導していけば批判的読みの授業が成立するのか、具体的で発展的な道筋が見える実践プログラムの開発と提示が、学校における教員構成の大転換期に当たる今だからこそ取り組むべき重要課題である。

このことは学習者にとっても同様である。これまで内容を確認する読み方しか経験していない学習者がいきなり高度な批判的読みを行うことは難しい。批判的に読むことへのレディネスがない(または少ない)学習者に、どのような活動から順次経験させていくことがよいのか、段階的、系統的な観点でのアプローチが必要である。

2. 研究の目的

次の3点を明らかにすることを目的とした。

批判的読みの授業における指導(=学習)内容。

批判的読みを授業において指導するために必要な授業づくりの観点。

、 の成果に基づき、学習者の批判的読みの力・技能の習得状況と、指導

者の批判的読みの授業力の習得状況のレベル段階が対応した実践プログラム構築のための観点。

3. 研究の方法

先行研究・実践を批判的読みの力の段階性、系統性の観点から再検討し、実践プログラム開発の理論的基盤の構築を図った。研究協力校における授業観察によって批判的読みに対する学習者の力、関心や教師の意識、指導技術のありようを観察、調査し、実践の実態を把握した。得られた知見をもとに課題を明らかにし、批判的読みに関する学習者のレディネス及び授業者の指導技術に対応したプログラムを仮設し、研究協力校において実践による検証を試みた。

4. 研究成果

(1) 批判的読みの授業における指導(=学習)内容全体の枠組みと段階性

図1は、批判的読みの授業における指導(=学習)内容の段階性を示したものである。森田信義(1989)、阿部昇(1996)を中心に、発達段階に即して批判的読みの内容を系統的に示した都教組荒川教研(1963)、井上尚美(2012)をあわせて検討した。図では、学習者が批判的な読み方を身に付ける段階として初期、過渡期、習得期を設定した。これは指導者の批判的読

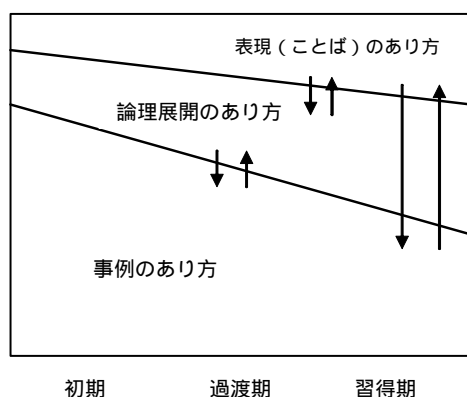


図1 批判的読みの指導(=学習)内容の段階性

みの授業レベルとしても当てはまる。

読みの内容の観点としては「事例のあり方」「論理展開のあり方」「表現(ことば)のあり方」の三つを設定した。「事例のあり方」を読み(指導)の対象とすることを基盤にし、「論理展開のあり方」「表現(ことば)のあり方」の順に扱いを増やしていく筋道とした。したがって、例えば初期段階では「事例のあり方」を取り上げて批判的読みを展開し、「論理展開のあり方」は副次的に、「表現(ことば)のあり方」については敢えて取り上げなくてもよいこととした。

批判的読みの指導(=学習)内容のうち、授業で最も取り扱いやすいと考えられるのは「事例のあり方」である。中でも「必要な事例か」「じゅうぶんな事例か」(いずれも数的または質的に)が、事例を分析する際の基本的な観点となる。「不要な事例はないか」は、それと連動する形で機能する。「偏りはないか」「欠如したものはないか」は、派生的、補助的な観点(内容)として位置づけた。場合によっては「偏り」「欠如」の観点からの分析によって「必要」「じゅうぶん」の検討に迫ることも考えられる。これらの観点は、森田、阿部、荒川教研、井上の各論に共通あるいは部分的に存在した。これらの観点をもとに事例のあり方を分析することは、必然的に「事例相互の共通性・差異性」を意識することになり、筆者の意図・発想を捉え、検討することの一助となる。

これらの観点を読みの対象とする根底には、「なぜ、その事例か」という大きな問い(観点)がある。「なぜ、その事例か」を「事例のあり方」を批判的に読むことの入り口、窓口とすることで、授業者にも学習者にも意識しやすくしようとした。

この「なぜ、その事例か」と問う背景として「何が書かれているのか、書かれ

ていないのか」という批評精神を置いた。これについては、井上が高学年における「文章(論の筋道の正しさ)」の内容として「隠されたデータはないか」という観点を設定している。また荒川教研も取捨態度の吟味として「何が書かれてあり、書かれていないか」を位置付けている。書かれていないものへ意識を向ける読み方に随時出合わせることで、現前にはないものにこそ物事の本質が隠されている場合があることを、段階的に身に付けさせるよう配慮しておきたい。

また、「なぜ、その順序か」は、示した分析の観点を具体的に用いて指導(学習)する場合の基本的な手立てともなる観点である。「事例相互の共通性・差異性」と連動して意識化できると、検討しやすい。「なぜ、その事例か、順序か」を大きな観点として持つことから学習指導が展開されると実際のだと思われる。

(2) 批判的読みを授業において指導するために必要な授業づくりの観点

説明的文章の批判的読みに対する認識、実践経験が、ともにほぼゼロの状態から2年間、全校で実践研究に取り組んだ公立小学校の教職員に対してアンケート調査を実施した。結果から得られた、実践者の感覚に即し、取り組みやすい説明的文章の批判的読みの授業づくりの観点(課題)は、以下のようなものである。

批判的読みを促す「基礎的課題(発問)」「(共通的課題<発問>)と「発展的課題(発問)」とをセットにして開発、活用する。

このことは、発達段階、学習者の能力差に対応するものとして、批判的読みの学習において扱うべき内容を精選、限定し、それを1単位時間、単元レベルで構造化することになる。

1～5年目の教員は「批判的読みの発問のあり方」への意識が特に強かった。批判的読みの実践課題の基本と位置付け、読みの課題、単元構成等との関連において構造化して設定する。

「実践を行った利点」の項で「学習者の成長」として挙げられた「自分なりの考えを持つ」「多面的な見方、考え方ができる」ことを、指導者として目指す学習行為の第一ステップの一つとして位置付ける。

(3) 学習者の批判的読みの力・技能の習得状況と、指導者の批判的読みの授業力の習得状況のレベル段階が対応した実践プログラム構築のための観点

学習者、指導者が批判的読み(の授業)に習熟していく初期段階(批判的読みの授業を1～2回程度経験)において、授業をどのように構想し、展開するか、実際の授業づくりをもとに見いだした。筆者に対する自己の考えを主張・表現することを批判的読みとして設定し、そうした読みに習熟していく初期段階の授業(5年)のあり方を、同じ教材を用いた二人の教師の批判的読みの実践のありようをもとに検討した。筆者の発想や意図を推論する活動と、一人の読み手としてテキストの内容・形

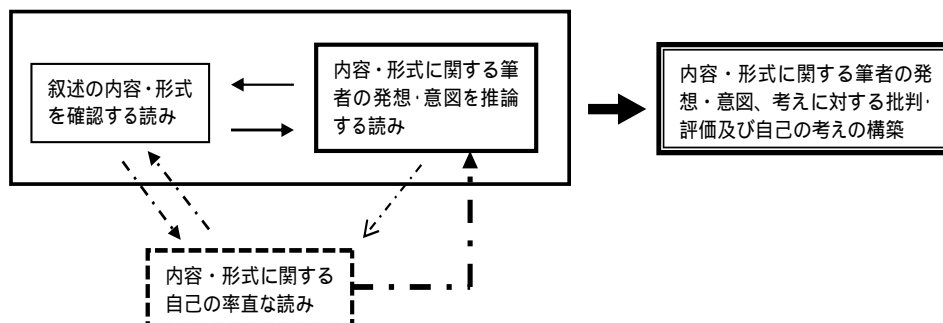


図2 説明的文章の批判的読みに習熟していく初期段階における読みのあり方

式に関する自己の読みを持つ活動の順序性を授業づくりの検証点とした。

得られた結果から、読み（指導）のあり方を図のように考えた。説明的文章の批判的読みは、本来的には実線矢印型で進展していくことを基本としたいが、初期段階では一点鎖線型のように、内容・形式に関する自己の率直な読みをもとに、筆者の発想・意図の推論に導くことも意図してみたい。どちらの路線を選択するかは、授業者、学習者の実態によって決定される。

さらに、本研究では、説明的文章の批判的読みの指導に習熟する過渡期では、次のことを観点とする授業モデルを構築することの可能性も示された。

批判的読みの要素（中でも具体例のあり方を精選し、焦点化して限定的に授業に位置づける。

授業展開として、筆者の意図を推論することと、自己の考えを形成することの順序性は、学習者の実態（自己の読み・考えを持ち主張できる程度、筆者の立場に立って推論することへの慣れの程度の違い）によって決定する。

具体例のあり方を軸に批判的読みのスキーマ形成の授業を、分量の少ないテキストを用いて行う。

説明的文章の批判的読みの指導（学習）内容を段階的に示したこと、批判的読みの指導に習熟する初期段階、過渡的段階において取り組むことが望ましい事例のあり方を中心とした指導（学習）内容とその手順の要点を示したことは、今後の批判的読みの実践を普及させることの足がかりとなる。本研究ではじゅうぶんに追究できなかった学習者の発達段階との対応、教材の特性との対応での批判的読みの実践モデルの構築が、今後の課題である。

<引用文献>

都教組荒川教研国語部会（1963）『批判読み』

明治図書

野田弘・香国研（1970）『筆者想定法による説明的文章の指導』新光閣書店

倉澤栄吉・青年国語研究会（1972）『筆者想定法の理論と実践』共文社

小松善之助（1981）『楽しく力をつく説明文の授業』明治図書

井上尚美（1983）『国語の授業方法論』一光社

森田信義（1989）『筆者の工夫を評価する説明的文章の指導』明治図書

阿部昇（1996）『授業づくりのための「説明的文章教材」の徹底批判』明治図書

河野順子（1996）『対話による説明的文章セット教材の学習指導』明治図書

長崎伸仁（1997）『新しく拓く説明的文章の授業』明治図書

文部科学省（2006）『読解力向上に関する指導資料』東洋館出版社

吉川芳則（2002）『小学校説明的文章の学習指導過程をつくる』明治図書

吉川芳則（2007）『小学校社会科教科書掲載の説明的文章を読むことに必要な学習内容』『国語科教育』全国大学国語教育学会、第62集、27-34

吉川芳則（2011）『事例のあり方を学習内容とする説明的文章の授業開発』『国語科教育研究』全国大学国語教育学会、第120回京都大会研究発表要旨集、231-234

有元秀文（2008a）『必ず「PISA型読解力」が育つ七つの授業改革』明治図書

有元秀文（2008b）『教科書教材で出来るPISA型読解力の授業プラン集』明治図書

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

吉川芳則、言語活動、教科書説明的文章の活用による連携、月刊国語教育研究、査読無、No.492、2013、pp.28-31

吉川芳則、説明的文章の批判的読みの授業における事例の指導のあり方、兵庫教育大学言語表現学会、第29号、2013、pp.43-53
〔学会発表〕(計5件)

吉川芳則「説明的文章の批判的読みの授業づくりの要点 指導に習熟する過渡期の教師の取組をもとに」、第126回全国大学国語教育学会名古屋大会、自由研究発表、2014年

吉川芳則「校内研究を通して実践者が得た説明的文章の批判的読みの授業づくりの要点」、第125回全国大学国語教育学会広島大会、自由研究発表、2013年

吉川芳則「説明的文章の批判的読みに習熟していく初期段階における授業づくりの要点」、第124回全国大学国語教育学会弘前大会、自由研究発表、2013年

吉川芳則「説明的文章における批判的読みの学習指導の観点と段階性」、第123回全国大学国語教育学会富山大会、自由研究発表、2012年

吉川芳則「説明的文章を批判的に読む授業を行うための初期段階の実践課題」、第122回全国大学国語教育学会筑波大会、自由研究発表、2012年

〔図書〕(計4件)

吉川芳則、説明的文章の学習活動の構成と展開、溪水社、2013、530

全国大学国語教育学会編、学芸図書、国語科教育学研究の成果と展望、2013、574(201-208)

長崎伸仁・吉川芳則・石丸憲一編著、学事出版、読解と表現をつなぐ文学・説明文の授業、2013、176(90-93)

吉川芳則編著、明治図書、クリティカルな読解力が身につく！説明文の論理活用ワーク(低学年・中学年・高学年・中学校編)

2012、96、100、92、88(10-17)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉川 芳則 (KIKAWA, Yoshinori)
兵庫教育大学・大学院学校教育研究科・教授
研究者番号：70432581

(2) 研究協力者

西森 智子 (NISHIMORI, Tomoko)
進藤 香代 (SHINDO, Kayo)
高森 隆子 (TAKAMORI, Takako)
井戸 愛子 (IDO, Aiko)
古川 薫 (FURUKAWA, Kaoru)
レイモンド 恵子 (RAYMOND, Keiko)